

沖縄県名護市屋部の手踊りエイサー(3)

小林 公江
(教育学科教授)

小林 幸男
(京都教育大学名誉教授)

はじめに

沖縄県の本部半島^{もとぶ}一帯には三線伴奏による手踊り円陣エイサーが数多く伝承されている^{さんしん}。

本論はその伝承地の一つである名護市屋部のエイサーを扱ったシリーズの3回目で、本紀要第6号「名護市屋部の手踊りエイサー(1)」、第7号「名護市屋部の手踊りエイサー(2)」に続くものである。(1)では屋部の伝承曲30曲の楽譜資料を作成し、(2)でその歌詞資料(歌詞の掲載と

共通語訳)の作成を試みたが、今回は2000年と2008年の故老からの聞き取りを中心に屋部エイサーの変遷を報告するとともに、作成資料に基づいて屋部エイサーの音楽の特徴を明らかにしていく。

1. 屋部エイサーの概観

1.1 屋部の概観

屋部は本部半島の付け根のやや西寄りに位置



し(地図参照)、17世紀中頃から既に名護間切の集落として文献に記載がある。名護間切は1908年に名護村、1924年には名護町となるが、1946年、屋部をはじめ宇茂佐・山入端・安和など7集落が屋部村として名護町から独立する。その後1970年に名護町・羽地村・久志村・屋我地村と合併して名護市が創られ、屋部村は屋部地区となった。

屋部は屋部村時代からこの地域の中心地で、今も名護市役所の屋部支所やこの地区の小学校(山入端以西と中山を除く)・中学校を置く。現在の人口は609戸、1,646人(2011年3月末日現在)。かつては地区最多であったが、今はベッドタウンとして急速に拡大した宇茂佐にその地位を譲っている。

屋部には行事全体が沖縄県の無形民俗文化財に指定された「八月踊」があり、これが最大の年中行事である²。青年会が担うエイサーの練習が盆に向けて進む中、八月踊のミンクバイ(面配り=配役)も字として行われ、踊団が結成される。盆が済みエイサーの季節が終わると今度は毎晩八月踊の練習が続くので、6月半ばから8月半ばまで、屋部は芸能一色となる。

1.2 屋部エイサーの変遷

1.2.1 エイサーの流れ

屋部エイサーは、円陣になった踊り手衆が三線弾き(地謡、エイサー地謡)の打ち出す歌に呼応して歌を返しながら踊るもので、これに景気づけの太鼓(太鼓打ち=鼓打ちャー)も加わる。このエイサーがいつ始まったかは明らかではないが、「エイサー」あるいは「エンサー」と呼ばれて、第二次大戦以前から伝承されてきた。戦中・戦後に一時中断したが³、1947(昭和22)年に再開して現在に至っている。

屋部エイサーは、古くから旧暦7月15日の御送り(送り火)後、午後9時頃から翌日まで不幸のあった家を除く全戸を廻って行うものであった。廻りきれないときには、翌16日の屋部小学校同窓会でのエイサー披露⁴後にも続けた。各家庭で曲目が重ならないよう配慮しながら本調子を中心に一二揚の曲も入れた数曲ずつを踊

り、新築の家では曲数を多めにしたという。エイサーを待つ家庭はご馳走や酒を用意し、ご祝儀も出す。戦後には陸上競技会の財源にもなっていたので祝儀をはずむ人もいたという。

こうして家庭を廻る形は1988(昭和63)年頃まで続いたが、その後はアジマー(十字路)や、新築の家などエイサーを招待をしたところを廻る形になって現在まで続いている。なお、アジマーに変わった頃からエイサー廻りは盆の中日の14日から始まるようになったらしい。

近年はひと組になって廻るが、各戸を廻っていた頃は青年も多く、二、三組が分担してあたり、三線弾きも各々複数いたようだ。組数は時代によって変わり、屋部出身の山入端つる(1906-2006)の『三味線放浪記』によれば、エイサーは西と東に分かれており、東が盛んであったので西からも見に行った[山入端1996:108-110]とある。これは戦前のことで、戦後は久護、大島、浜・兼久の三組で廻っていたため今でも太鼓が三個あるのだという。三組は1985(昭和60)年が最後であったようだ。

エイサーの担い手は昔から青年達である⁵。ただし現在は男女一緒だが、戦前は男のみであった。『屋部地区の芸能』(名護市教育委員会)掲載の宜保榮治郎「字屋部のエイサー歌(その1)―1967年八月採集―」には「男は昔は紺地をつけていて、女は踊れなかった」[名護市教育委員会 2006:169]とある。女性の参加は戦後のことらしい。山入端つるの前掲書には、エイサー衆が家々を廻って酒などを集めた後「広場に引き揚げ、美しい月光の下で男女入りまじり、うたい興ずるのであった」[山入端1996:108-109]とあるが、これはおそらくエイサー後の男女の集い、所謂「反省会」のようなことを指しているのだろう。

1.2.2 衣装や楽器

エイサー衆の衣装にも時代による違いが見られる。戦前は紺地の着物に、踊り手が鉢巻をし、三線弾きが笠を被り、足は阿檀の葉で作った草履か裸足であった。隣接する宇茂佐でも戦前は男のみが紺地の着物で踊っていたという。終戦

直後は物不足で男はズボンにシャツ、女はもんぺにブラウスといった出立ちであった。その後、男女ともに浴衣となつて⁶、近年は、女性は色とりどりの浴衣、男性は「やぶ」と書いた揃いの着物にゴム草履である。

伴奏楽器の三線は、かつてのエイサーでは大抵が渋を塗った紙張り（渋張り）で、時に兎や猫の皮張りもあったという⁷。高価で「うえーきん人」（＝金持ち）しか持てなかった蛇皮張りの三線は、野外で夜露も落ちるということで、決して貸してはもらえなかったそうだ。終戦直後は落下傘の傘を張ったものもあり、絃も電話線であった。太鼓も水缶で代用したという。

1.2.3 エイサーの練習

練習は、昔は旧暦6月15日の「新米」から開始したという。「新米」は新米で飯を炊く祝いで、古くは御願もあつたらしい。今も凡そその頃から練習を開始する。練習場所は昔は集落から離れた浜の方の墓地（はんざ）の脇だったという。農家が多く就寝時間も早かったため、安眠を妨げないようとの配慮からであった。1970年頃になると参加人数も増え、屋部中学校校庭が練習場所となった。1980年頃からは、公民館や公園の整備に伴い公民館脇に変わっている。はんざ脇の時代は灯りの調達も重要な作業で、真竹を切って石油を入れた松明を一つ灯したとのことだが、この準備は新入青年会員の役割であった。

練習では、「囃し練習をする」といって、3日（一週間ということも）ほどは座ったままで歌を練習をしてから踊りに移る。これは今でも行われる方法とのことだが、筆者は同様の話を本部町瀬底や東などでも聞く。手踊りエイサーでは踊り手と地謡との歌の掛合いが重要で、踊りもそれと深く関わるため、こうした方法が必要なのであろう。練習は以前は厳しく、腰を入れて踊るため翌日は足腰が痛かったそうだ。

以前の練習では本調子・一二揚の全曲を踊っていたが、本番では本調子を中心になるため、2000年頃から本調子だけを練習するようになった。このため現在の青年層は一二揚の曲をほと

んど知らない、という残念な状況にある。

1.2.4 エイサー大会・コンクール

屋部エイサーの曲は現行だけでも他集落に比較すると数が多いが、途絶したものも含めるとその数はさらに増える。屋部のレパトリイは、近隣のエイサー曲と同系のものがある一方で、他にはない組になる踊りや共通語の曲などを含んでいる。こうした多様性は、戦後に新しい振付の曲を加えたことにもよるが、近隣のエイサーを観る機会が多かったことも関係あるのではなかろうか。ここでは、屋部小学校同窓会やコンクールなど、盆行事以外のエイサーの機会について述べておきたい。

まず、小学校の同窓会について触れる。屋部小学校は1887（明治20）年に名護小学校屋部分教場としてスタートし、同窓会は1913（大正2）年に発足した。現在、同窓会は旧暦7月16日に開催され賑わっているが、『屋部小学校創立周年記念誌』には、「何百人と集まりましたよ。水泳大会とか、エイサーなど四か部落の集まって勝負してました。宇茂佐などは毎年優勝していましたよ」[創立百周年記念事業期成会記念誌編集委員会 1990：92]とあるので、かつては今以上に盛んな催しであったことがわかる。また、同書の1952年の項には「校庭で本校同窓生の各区エンサーコンクールを盛大に催す（9.5）」[1990：172]という記述もある。その後コンクールはなくなったが、今でも同窓会の最後は櫓を囲んでの盆踊りやエイサーで、近年は屋部エイサーと宇茂佐エイサー（以上手踊り）、屋部若獅子会（太鼓エイサー）⁸で締めくくることが恒例となっている。前述の記念誌のように、以前は校区の3～4集落の手踊りエイサーが参加していたようだ⁹。こうした催しは戦前からあったが、戦後により盛んになったとのことである。同窓会は、他集落のものも観ながら自分達のエイサーを充実させていく一契機となったと考えられよう。

一方、エイサーコンクールは名護町時代、屋部村時代に数多く行われた。故老達によれば、1949～1950（昭和24～25）年頃（1960年頃とい

う説もある), 名護の琉米文化会館で行われたエイサーコンクールで屋部は2位になったようだ。1952年8月29日の琉球新報には、9月7日に琉米会館で名護のエイサー大会開催という記事があり、「隣村の屋部村も参加し名護の浦曲をエイサーの踊りでわきたたせ全市民は心ゆくまで名護情緒を満喫しようと張り切っている」「盆踊交歓、エイサーコンクールが行われる予定」(1952. 8. 29 琉球新報)とある。《名護ぬ浦節》は、屋部村(屋部地区)では屋部だけが伝承していることから、故老が語るエイサーコンクールはこれではないかと思われる。

1946年から1957~1958(昭和34~35)年頃までの屋部村時代には屋部小学校で青年会主催のエイサーコンクールも行われており、安和、部間、山入端、屋部、宇茂佐、旭川、勝山、中山の8区が参加したという¹⁰。

名護町も屋部村もエイサーは手踊りであることから、歌詞や曲の類似には大会やコンクールを通して互いに影響した結果も与っていると考えられよう。現在では「名護市青年エイサー祭り」が例年行われており、屋部もたびたび出場している。

1. 2. 5 太鼓エイサー

屋部では、1960(昭和35)年頃に一時太鼓エイサーを行った時期がある。半打鼓を寄付した人がいたため、与勝(平安座、屋慶名、平敷屋の各説がある)から太鼓エイサーを習ったというものである。ただし、手踊りエイサーもしたとのことで、家廻りは手踊りだったのだろう。中・南部からの盆の帰省者が参加できないことや、やはりムラに伝わるエイサーが良いということで、太鼓エイサーは1年だけ(2年ほどという説も)で終わったという。

今は集落として太鼓エイサーを行っていないが、旭川で生まれた太鼓エイサーから発展した「屋部若獅子会」の本拠地が屋部にあることから、これに参加する若者も多く、手踊りエイサーへの参加が減少しているといわれる。

1. 2. 6 ピンジエイサー

屋部では、25年ほど前までは青年会のエイサーの他に「ピンジエイサー」(ひねくれエイサー、の意)と呼ばれるエイサーも行われていた。ピンジエイサーは宇茂佐や勝山、本部町瀬底にもあったという。これはエイサー衆OBの壮年層(向上会や婦人会など)が集落を盛り上げようと思いつきでするもので、年によってやらないこともあれば飛び入りもあり、三線なしの時もあれば水缶やブリキ缶を太鼓代わりに叩くこともあるなど、特に定めもなく行われていた。廻る所も、例えば裕福な家を中心に20軒ほどだけなど特に取り決めもなかったらしい。ただし、必ず青年が廻った後でしか行わなかった。豊作への願いが託されていたこともあり、ピンジエイサーも歓迎されたという。

2. エイサー曲について

現在、屋部に伝承されるエイサーは、本調子24と一二揚6の計30曲で、本部半島地域ではかなり多いほうである。このうち1曲目と30曲目は同じ旋律だが、歌詞が異なるために地元では別の曲として扱われる。現在の青年達は本調子しか伝承していないが、集落全体の伝承という捉え方から、まずこの30曲を検討の対象とする。更にこの他に途絶えた曲もあることが2008年の調査でわかったため、これらも含めて屋部エイサー曲のレパートリイとする。

表1はレパートリイ全体を記したもので、1~30が現行の伝承曲、番号に「*」を付したものが途絶曲である。現行曲12は、異なる2曲からなるため、曲名に1・2と記して区別した。

2. 1 独特な曲

表1からわかるように、屋部のレパートリイには独特な曲が多い。手踊りエイサーでは、各集落のレパートリイは各地域の定番であることが多く、独特な曲はせいぜい1~2曲程度である。これに対して屋部では、現行の9曲と途絶曲2曲の計11が独特な曲である。

このうち17曲目の《ゼイサー節》は屋部出身で伊江島の教員をしていた人が代表的な伊江島

表1 屋部の伝承曲と他地域の分布

曲名	新曲	独特な曲	屋部地区	名護地区	今帰仁村	本部町
1 打ち囃子鼓・《唐船どーい》			△	△	△	△
2 久高万寿主			◎	◎	○	○
3 ドンドン節・《作たる米》			3	△	1	1
4 テンヨー節			◎	◎	◎	◎
5 エイサー節・《念仏》			◎	○	◎	◎
6 稲摺り節			○	○	◎	○
7 越来節			○	○	○	8
8 今帰仁ぬ城			○	○	◎	○
9 目出度イ節	戦後		△	○	△	6
10 鳩間節	戦後		2	2	1	
11 伊計離節		○	1	1		
12-1 いちゅび小節1・《糸満人》		○	1			○
12-2 いちゅび小節2・《いちゅび小節》			△	○	△	8
13 名護ぬ浦節	戦後	○	1			
14 ヘイヨースーラーヨー			3	○		
15 南嶽節	戦後	○	1	2		1
16 若夏の訪れ	戦後	○	1			
17 ゼイサー節(砂持節)	戦前	○	1			
18 スライサ(スーリ東)			◎	○	◎	10
19 イマデイスナー節・《デンスナー節》			2		◎	1
20 海やから一節			○	○	○	○
21 雨降らすなよー・《三村節》			○	○		
22 ビールラー(二合節)			○	△	○	○
23 ハイニ才達節	戦後	○	1		1	
*1 伊舎堂前			◎	◎	○	○
*2 一路平安			○	3		○
24 ダンゴ節			◎	◎	◎	◎
25 仲座兄			○	◎	◎	◎
26 六角堂		○	1			
27 海ぬちん法螺			○	◎	◎	◎
28 スラサエースラヨー・《下庫裡小》			2	◎	1	8
29 ハラドンドンセー(十七八節)		○	1		○	6
*3 カマヤシノ			◎	◎	◎	◎
*4 谷茶前			◎	◎	◎	◎
*5 東前門			○	4	3	○
*6 だんじゅ嘉例吉			3	○	○	8
*7 加那ヨー			○	3	○	
*8 ヨーテー節・《ましゅんく節》		○	1		4	2
*9 ジントーヨー節			2			
*10 浜千鳥		○	1			
30 唐船どーい			△	△	△	△

屋部地区……7集落 名護地区……10集落
 今帰仁村……18集落 本部町……本調子24集落、二二場21集落
 ◎は大半、△は半数程度、○は◎と△の中間程度の伝承数を示す。
 半数以下は数字で示し、伝承がない場合は空欄とした。
 《唐船どーい》の扱いは多様であるため伝承数は問わないこととした。

民謡《砂持節》を習い覚えて歌っていたものを、80年ほど前に青年達がエイサーに加えたということである¹¹。《砂持節》は伊江島民謡としてよく知られているが、手踊りエイサー曲になっているのは屋部だけである。

13《名護ぬ浦節》、15《南嶽節》、16《若夏の訪れ》、23《ハイニ才達節》は戦後新たに導入された曲である。その時期は『屋部地区の芸能』には1949(昭和24)年頃とあるが、2008年の聞き取りではさまざまな意見が出て、《名護ぬ

浦節》《南嶽節》と《若夏の訪れ》《ハイニ才達節》とは導入時期が異なっている可能性が高いとのことであった¹²。このうち《名護ぬ浦節》は、前述の1952年8月29日付け「琉球新報」の「名護の浦曲」にあたるので、導入は比較的早かったであろう。これも屋部だけが伝承している曲である。《南嶽節》の導入についてはよく判らない。この曲は極めて有名な舞踊曲ではあるが、エイサーに取り入れた集落は少なく、屋部地区では屋部だけである。

後者の2曲は、屋部小学校の教員で、屋部村長から立法院議員になった吉元栄真の妻でもある吉元涼子が振付けをし、10日ほど練習したそうだ。沖縄音階に標準語歌詞という《若夏の訪れ》はやはり屋部だけで伝承されている。テンポも途中で変わる変化に富んだ踊りである。《ハイニ才達節》は『琉球民謡工四』¹³にもあるが、本部半島のエイサーでは他には今帰仁村越地のみにある。組になって手を取るフォークダンス風の振り付けがされている。

11《伊計離節》は舞踊曲として知られ、女エイサーや臼太鼓のレパートリーでもある。しかし、エイサーとしては本部半島地域では他には名護市東江にあるだけなので、やはり独特な曲ということになる。民謡としてよく歌われる29《ハラドンドンセー(十七八節)》や*7《ヨーテー節(ましゅんく節)》は、エイサー曲としても前者が今帰仁村や本部町で比較的分布数も多く、後者も少ないながらも幾つかの集落で歌われているが、名護市では屋部のみの伝承である。

また、12-1《いちゅび小節1(糸満人)》は本部町の代表的なエイサー曲だが、本部町以外では屋部だけが伝える。26《六角堂》、*10《浜千鳥》もエイサーとしての伝承は屋部だけである。

その他、今帰仁村に伝承数が多い19《イマデイスナー節(デンスナー節)》は、名護市では他には屋部に隣接する宇茂佐・旭川だけにある。また、*9《ジントーヨー節》も名護市では勝山と屋部だけに伝わる。このように屋部には独特の曲以外にも数少ないものがみられる¹⁴。

2.2 近隣の集落との関係

前述のように、屋部小学校同窓会やかつてのエイサーコンクールなど、屋部地区では互いのエイサーを見る機会が多かった。エイサーコンクールについて、屋部の故老らは、部間（現在は安和の小学^{あざ}）のエイサーは15～6名と少数だったが渦巻きをしていて上手だったとか、宇茂佐もよかったなど思い出を語る。こうしたまとまりがあるためか、次のような点が多く屋部地区の集落で共通する。

- ・《念仏》は「七月^{ひちくちたなほた}七^{なな}あるいは「七月^{ひちくち}……」と始まり、名護地区や本部町の「山に育ちよる山鳥」系の歌詞はない¹⁵。
- ・《テンヨー節》の囃し詞が名護地区や本部町の「シターリヨース」ではなく「ハーリヨース ユーイガナ」系である。
- ・《稲摺り節》の囃し詞は「粟^{イニシ}又^{アワ}選^ユラリミ 米^{クミ}又^ユドウ選^ユラリル スーリサーサー」で、東江以外の名護地区や本部町とは異なる¹⁶。
- ・《海ぬちん法螺》の囃し詞には「支度^{シタク}又^{ワツ}悪^{ワツ}サヤ 側^{サバ}ナリナーリ サー^{ウチユ}浮^{マンナカ}世^{マンナカ}又^{マンナカ}真^{マンナカ}中^{マンナカ}」という一般的なものの他に「酒^スヤボンボン 茶^{ウチユ}碗^{ウチユ}シ^{ウチユ}飲^{ウチユ}ミ^{ウチユ}飲^{ウチユ}ミ^{ウチユ}〈サー マカイシ^{ウチユ}飲^{ウチユ}ミ^{ウチユ}飲^{ウチユ}ミ^{ウチユ} 浮^{ウチユ}世^{ウチユ}又^{ウチユ}真^{ウチユ}中^{ウチユ}」がある。この地区以外でも名護地区東江にあるが、一般にあまりみられない。
- ・《三村節》の囃し詞には、例えば「雨^{アメ}降^{アメ}らすなよー 元^{ヒト}被^{ヒト}ゆんどー 〈サー^{ヒト}嘉^{ヒト}例^{ヒト}吉^{ヒト} 嘉^{ヒト}例^{ヒト}吉^{ヒト}」のように「サー^{ヒト}嘉^{ヒト}例^{ヒト}吉^{ヒト} 嘉^{ヒト}例^{ヒト}吉^{ヒト}」がつく。他集落は「元^{ヒト}被^{ヒト}ゆんどー」で終わったり、名護地区で「イヤササウネササ ヒヤ マタウネササ」が加わるなど多様である。
- ・《目出度イ節》では「スリスリ 目^メ出^メ度^メイ 嘉^メ例^メ吉^メ 自^メ出^メ度^メイ」と囃し詞に「嘉^メ例^メ吉^メ」が入る。「スリスリ 目^メ出^メ度^メイ」で終わるか「目^メ出^メ度^メイ 目^メ出^メ度^メイ」と続くのが一般的である。

こうした共通点の一方で、山入端・勝山・安和は安和小学校校区であるため同窓会が別であったことや、安和が本部町に、屋部が名護地区に近いということなども関わって、屋部地区では校区や地域による違いもみられる。そのため、ここでは屋部小学校校区の宇茂佐、旭川、中山（後に四年生まで分校となる）に焦点を当

てて屋部と比較してみたい。なお、屋部の東側の宇茂佐は屋部と同様に17世紀中頃から既にあった古い集落でエイサーも戦前から行っていた。一方、旭川と中山は1943（昭和18）年に分区した新しい集落であるが¹⁷、エイサーは共に分区以前から独自にあった。中山では小字の山入端原と内山で独自にエイサーをしていたが、それを一つにまとめたのが中山エイサーである。旭川、中山ともに隣り合った本部町伊豆味との関連が指摘されている¹⁸。

表2は屋部と宇茂佐、旭川、中山の伝承曲を屋部を中心にまとめたものである。宇茂佐・旭川・中山の左欄の○は屋部と同様の曲が現行にあることを、●はかつてあったことを示している。ただし、旭川では近年エイサーが途絶えがちになっており、中山はすっかり絶えて歌詞資料だけを残している。

また、表2の宇茂佐・旭川・中山の右欄にある1～3の数字は、その曲の演奏順グループを示す。というのも、屋部以外では「1.本調子→2.一二揚→3.再度、本調子」という演奏順序が明確だからである。特に宇茂佐は、1の本調子が9曲、後段の3の本調子が7曲（何れも《唐船どーい》を含む）とはっきり分かれる。名護地区の中心地である大兼久（現在は大北・大東・大西・大中・大南に分かれている）にもこうした前後の本調子部分があって《ヘイヨー》《三村節》が後段に含まれるので、その影響ではないかと思われる。屋部地区の特色は、他地域では通常ごく始めの方にある酒貰い歌《ピーラルラー》を終盤で踊ることである。屋部では本調子が前後に分かれずまとまっているが、本調子の終盤で《三村節》《ピーラルラー》を踊るので、もとは他集落同様の構成だったかもしれない。

表2からわかるように、各集落には他とは異なるレパートリーがあるが、せいぜい1～2曲で、屋部と比較すると、前述の独特な曲以外はかなりの曲が共通であることがわかる。山入端つるは前掲書で屋部のエイサー曲が24曲〔山入端1996：110〕と書いているが、それはこれら他集落とも共通な曲であろう。

表2 屋部・宇茂佐・旭川・中山の伝承曲

	屋部	宇茂佐	旭川	中山
1	打ち囃す鼓・《唐船どーい》	○ 1		
2	久高万寿主	○ 1	○ 1	● 1
3	ドンドン節・《作たる米》	○ 1	○ 1	
4	テンヨー節	○ 1	○ 1	● 1
5	エイサー節・《念仏》	○ 1	○ 1	● 1
6	稲摺り節	○ 1	○ 1	● 1
7	越来節	○ 3	●	● 1
8	今帰仁ぬ城	●	○ 1	● 1
9	目出度イ節	○ 1	○ 1	● 1
10	鳩間節	○ 1		
11	伊計離節			
12-1	いちゅび小節1・《奈満入》			
12-2	いちゅび小節2・《いちゅび小節》		○ 1	
13	名護ぬ浦節			
14	へいヨースーラーヨー	○ 3		● 1
15	南嶽節			
16	若夏の訪れ			
17	ゼイサー節(砂持節)			
18	スライサ(スーリ東)	○ 1	○ 1	● 1
19	イマデイスナー節・《デンスナー節》	●	○	
20	海やから一節	●	●	
21	雨降らすなよ一・《三村節》	○ 3		● 1
22	ピーラルー(二合節)	○ 3	○ 3	● 1・3
23	ハイニオ達節			
*1	伊舎堂前	●	●	
*2	一路平安		○ 1	
24	ダンコ節	○ 2	○ 2	● 2
25	仲座兄	●	○ 2	● 2
26	六角堂			
27	海ぬちん法螺	○ 2	○ 2	
28	スラサエスロー一・《下庫裡小》	○ 2		
29	ハラドンドンセー(十七八節)			
*3	カマヤシノー	○ 2	○ 2	● 2
*4	谷茶前	●	○ 2	● 2
*5	東前門	●	●	
*6	だんじゅ嘉例吉	○ 3		
*7	加那ヨー	●	●	
*8	ヨーデー節・《ましゅんく節》			
*9	ジントーヨー節			
*10	浜千鳥			
本	30 唐船どーい	○ 3	○ 3	● 3
本調子	宇茂佐 仲順流り	○ 1		
	旭川 ジントーヨー節		○ 1	
	旭川 カイヤスヨー一・《湊節》		○ 3	
	中山 サイヨーサイ節			● 1
二	宇茂佐 城家ん後山・《雨降花染節》	○ 2		

二重線以下は、各集落独特の曲

次に、歌詞や囃し詞、そして旋律に注目しながら曲を比較する。中山エイサーは歌詞しか残されていないため旋律比較はできないが、囃し詞から系統を辿ることは可能である。

囃し詞をみると、中山は、《テンヨー節》が「シターリヨース ユイヤナー」、《三村節》が「イヤササ ウネササ スリサーサー」、《稲摺り節》が「稲摺り摺り粟ユリユリ イヤササ ウネササ スーリサーサー」と、屋部地区の一般的な形になっていない。おそらく曲の伝わる経路の違いに由来するのであろう。

一方、屋部地区に共通する囃し詞が多いにも

拘わらず屋部では、例えば《稲摺り節》には他に「ウネマタ ウネササ アネマタ ウリササ スーリサーサー」という言いまわしもある。こうした囃し詞の一寸とした変化は《海ぬちん法螺》の「沖繩かいどー 浮世ヌ真ん中〜」や、《六角堂》の「ワネ カンドゥナートゥサヨンゾヨー〈ワネ スンドゥナートゥサヨー ンゾヨー〉」のようにわずかに変化をつけて同じ反復を避ける形に見られる。かつての歌の即興的なやりとりの気風の名残なのであろうか。

《今帰仁ぬ城》では歌詞の一、二句目の間の囃し詞「ヨンサー」の有無が注目点である。途絶で判断できない宇茂佐を別として、屋部は「ヨンサー」を入れず、旭川と中山は「ヨンサー」を入れる。筆者の調査で、「ヨンサー」は本部町と名護地区で一般に入れないのに対し今帰仁村では必ず入るが、本部町でも今帰仁村に接する伊豆味や大堂、照原などでは入れることがわかってきたので、この曲では屋部は名護地区から、旭川と中山は伊豆味あるいは今帰仁村から影響を受けたと考えることができる。

12-2《いちゅび小節2》(歌詞1参照)は民謡やエイサーでよく聴く曲である。しかし屋部では、一般的な《いちゅび小節》のように「いちゅび小に惚(おぼ)りてい〜」とは始まらず、譜1のように「影小ぬあんでいち〜」が始めにきて、2番で「いちゅび小に惚(おぼ)りてい〜」となる。『屋部地区の芸能』所収の1967年採集の「宇屋部のエイサー歌(その一)」でも同様の掲載がある。一方、旭川にも「影小ぬ〜」の類歌があり、旋律も屋部と似るが、以下に掲げるようなアンダーラインの囃し詞が続き、かつてあったという《今三世(イマサンジン)》とは別の独立した歌として扱われる(歌詞2参照)。

おそらく屋部では、「影小ぬ」に始まり「吾達心〜」の囃し詞の付く曲と、「いちゅび小に」に始まり「思ヤーガ来ヨン〜今三世」の囃し詞の付く旋律の似通った曲(=沖繩の典型的な《いちゅび小》)とが一つにまとまったことなのであろう。しかし、「影小ぬ〜」は他ではみない歌詞でもあるので、屋部と旭川の交流

も推察できる³⁰。

譜1 屋部《いちゅび小節2》

1 かーぎ ーぐわぬ ーあん てい ち ーじまん
 ーすみ ーあ ーぼ ぐわ くか ーぎ ぐわ や
 ーかわどやっ さい ちむち でーいち ど
 わったー くくるん ひらっついでい しり こーり ちっばん
 あましよーが) イマ チョイナ (ウネ サンジン イヤササ)
 2 いちゅび ーぐわに ーふ ーり てい ーやまち
 ーばる ーか ーゆ てい くか ゆてい ーみじら
 さ や ーちなぬ ーばん ず ウムヤガ チョンチョン
 カナシガチョン)イマ チョイナ (ウネ サンジン イヤササ)

歌詞1 屋部《いちゅび小節》

影小ぬあんでいち 自慢すみあば小
 影小や 皮どうやっさい 気持第一どー
 吾達心 ひらっついでい知り 氷桔飯甘生姜
 今チョコイナー ウネ 三相 イヤササ

歌詞2 旭川《吾達心 ひらっついでい知り》

サー影小ぬあんでいち 自慢すみあば小
 影小や 皮どうやっさい 気持第一どー
 吾達心 ひらっついでい知り スリいっぺー甘生姜
 うりうり野の石仏 いちいちちよんちよん
 チェエ

同様の2つの集落共通の曲に、屋部と宇茂佐の《鳩間節》がある。聞き取りによれば何れも

戦後の導入で、屋部は1949(昭和24)年頃という²¹。《鳩間節》は名護地区の宮里や為又にもあり、宇茂佐に隣接する宮里の導入が昭和初期であるので、宮里からの影響かもしれない。

このような名護地区側からの影響についていえば、3《作たる米》……宇茂佐・屋部・旭川、14《ハイヨースラヨー》……宇茂佐・屋部・中山、28《スラサエスラヨー》……宇茂佐・屋部、など屋部地区では屋部校区のみに分布する一連の曲もその例である。

また、屋部では廃絶曲なので確認できないが、《だんじゅ嘉例吉》は宇茂佐では譜2のように「逸ルヨー船 良ウ逸イセイ」と歌われ、下段のような一般的な「逸ルヨー船ヨー 良ウ逸イセイ」とはならない。名護地区では前者が一般的なので、ここからも名護地区との関連が考えられる。

譜2 《だんじゅ嘉例吉》

宇茂佐 ハルヨ フニ ユ ハイ セ
 平敷 ハルヨ フニ ユ ハイ セ

以上のように、屋部エイサーは近隣の集落のエイサーとも関連を持ちつつ、今帰仁村や本部町側からではなく、名護地区側からの影響を強く受けているといえよう。

おわりに

屋部エイサーの現在のレパートリイは、本部半島地域の数多い手踊りエイサーで独特の曲、あるいは屋部地区や名護地区で独特の曲が全体の三分の一を占め、それが現在のエイサーの大きな特徴となっている。一方で、戦後直後までの屋部のレパートリイは、この地域一帯のエイサーと同様であったことも明らかとなった。

屋部エイサーが現在のような構成になっていった契機はおそらく、同窓会のエイサー演舞や村内でのコンクール、また戦後の新時代の要請等が関わっている。新たなレパートリイには新しい振付けを伴ったものもあるが、近隣地域

との関わりで習い覚えたりヒントを得たものもあると思われる。屋部は、他集落より積極的に新しいエイサー曲を取り入れ、レパートリーを変化させていったということであろう。囃し詞や歌詞の端々に見える多様性も、こうした屋部の姿勢と関わっているであろう。

エイサー曲を細かに検討していくと、エイサーのレパートリーや歌詞、旋律の形成には、戦前戦後を問わず、暮らしに関わる様々な地域との交流が与っている。そうした観点から屋部のエイサーをみると、屋部小学校同窓会などとの関連や地理的な近さから宇茂佐、旭川との関連が強い。しかし、旭川に本部町や今帰仁村側の流れがあるのに対し、屋部は宇茂佐と共に名護地区側からの影響を強く受けているようである。今回はこうしたことを視点に、屋部エイサーの踊りについても考えていきたい。

謝 辞

エイサーや行事について多くのことをお教え下さいました屋部の壮年・故老の皆様、青年会の皆様に心より御礼申し上げます。

註

1. 文献の資料も含め、約60箇所¹⁾のエイサー伝承(曲名や歌詞の一部を含む)が確認できる。
2. 八月踊は旧暦8月に举行されるもので、伝統的な舞台舞踊や組踊が上演される。旧暦7月の面配り(以前は20日頃、現在は旧盆の前)に始まり、練習、道の整備、道具づくりなどを経て前仕込(7日)、仕込(8日)となり、8月10日に正日を迎える。翌11日が別れ(最終日)となる。
3. 戦時中の1944(昭和19)年については不明だが、1945(昭和20)年には行ったという説もある。筆者らが話を伺った故老達は何れも戦後になってエイサーに参加したため、子ども時代の戦前については記憶がやや曖昧である。
4. 発足当初の同窓会の日程については不明だが、旧暦7月16日の開催はかなり以前からのようである。同窓会后、運動場で各集落のエイサーが行われるのが恒例で、約30年前からは屋部の青年が檜建てに関わっている。
5. 青年会の年齢上限は、時代と共に青年達の数

とも相俟って変化している。以前の青年会は25歳までで、この時の向上会は37歳までであったが、次いで青年会27歳、向上会40歳となり、現在では青年会30歳、向上会50歳となっている。

6. 1940年生まれの人²⁾がエイサーに参加した頃には既に浴衣となっていたという。
7. 兎がよく鳴ったらしい。また、紙は重ね張りしたという。
8. 屋部若獅子会は隣接する旭川で1978年に始められた太鼓エイサーがもともとなっている。後に、それを始めた人が屋部に拠点を移して活動している。太鼓の魅力に惹かれて参加する屋部の若者も多いと聞く。
9. 参加は屋部、宇茂佐、旭川、中山である。宇茂佐にも浮き沈みがあるが、旭川は1960年頃までは各家を廻っており、1978年に太鼓エイサーを始めた。これは屋部若獅子会に引き継がれている。中山は30年以上前に中断したままである。したがって、屋部や宇茂佐以外はかなり早い時期に参加しなくなったと思われる。
10. 部間は1949年～1958年は独立した行政区で、その後安和の小字となった。エイサーは本部町崎本部から習ったらしい。聞き取りで話題にはならなかったが、隊列になった《スーリ東》³⁾が有名で、屋部区の青年が習いに行ったようだ[名護市教育委員会 2006: 380]。
11. 《ゼイサー節》は『屋部地区の芸能』には1949(昭和24)年頃にエイサーに導入されたものとして○印がついている[名護市教育委員会 2006: 173]が、筆者らの聞き取りでは戦前に導入されたという。
12. 2008年の聞き取りでは、導入時期は1947～48(昭和22～23)年頃、1955(昭和30)年以前、1958(昭和33)年頃と諸説あってはっきりしない。
13. 『琉球民謡工四』第三巻(喜納昌永・滝原康盛 琉球音楽楽譜研究所 1985年) pp. 25-26
14. 『屋部地区の芸能』には山入端エイサーの歌詞が記載されており(pp. 308-310)、そこにも《ジントーヨー節》がある。しかし、筆者らの聞き取りでは、これは山入端の伝承ではないようであり、記載の歌詞は勝山と全く同じなので、本稿では山入端の伝承曲には含

めていない。

15. 現在、宇茂佐には「山に育ちよる」系の歌詞があるが、これは、戦後に加えられたものである。
16. この囃し詞は名護市大北にもあるが、現在の^{おおきた}大北エイサーのもとになった^{おおがねく}大兼久エイサーにはない。大北が終戦直後に^{はねち}羽地地区の^{やまだ}山田に伝えた大北エイサーとも異なることから、後から取り入れたものと考えられる。
17. 旭川は屋部からの5小集落と山入端からの1小集落で分区、中山は屋部からの1小集落、山入端からの2小集落、屋部・宇茂佐・宮里に属する1小集落で分区した。旭川は敬老会を兼ねた踊をしていた頃、屋部の踊を稽古したり、師匠を頼んだことがあるそうだ。
18. 伊豆味との関連についての指摘は、筆者らの聞き取りで得たものである。
19. この歌詞集では《糸満人》は〔九〕として別の歌の扱いとなっている。
20. 名護市大北の《いちゅび小》でも、2節目にこの歌詞が歌われるが、「氷桔飯甘生姜」がなくすぐ囃し詞に入る。ここでは《いちゅび小》の2節目の歌詞として取り入れられたのであろう。
21. 宇茂佐の聞き取りは、2011年2月21、22日。『屋部地区の芸能』には、導入時期が「昭和

10年代後半から20年代にかけて」と記されている。

引用参考文献

- 小林公江・小林幸男 2009『[[楽譜・歌詞資料] 沖縄県名護市の大兼久エイサー—大東・大中・大西・大南・大北・山田—』私家版
- 小林公江・小林幸男 2010『[[楽譜・歌詞資料] 沖縄県宇茂佐の手踊りエイサー』私家版
- 創立百周年記念事業期成会記念誌編集委員会編 1990『屋部小学校創立百周年記念誌』創立百周年記念事業期成会
- 名護市教育委員会文化課市史編さん係 2006『屋部地区の芸能』（名護市史研究資料第88集 芸能調査資料2）名護市教育委員会文化課市史編さん係
- 名護市史編さん委員会 1988『名護市史 本編・11 わがまち・わがむら』名護市役所
- 名護市史編さん委員会 2003『名護市史 本編・6 教育別冊 学校誌』名護市役所
- 半田一郎編著 1999『琉球語辞典』大学書林
- 山入端つる 1996『三味線放浪記』ニライ社
- 喜納昌永・滝原康盛 1985『琉球民謡工四』琉球音楽楽譜研究所